

## 伝説の幕開き

— 『シャーロック・ホームズの冒険』と『ストランド・マガジン』 —

山口 和彦

キーワード： Doyle ホームズ パジェット 表象性 ダンディ

I

伝説として後世にまで語りつがれる名作が誕生するとき、そこに天佑ないしは僥倖とでも称するに足る霊妙な力が働くことがある。作品の生みの親たる作家の才能に、天の時、地の利、人の和が加わって、その作品の成功を後押しする場合である。アーサー・コナン・ドイルの文名を一躍世に知らしめ、のちに『シャーロック・ホームズの冒険』として刊行されることになる12の短篇が生まれた背景にも、そうした僥倖が働いていたものとおぼしい。

1891年4月、ドイルの著作権代理人を通じて『ストランド・マガジン』編集部へ、探偵シャーロック・ホームズを主人公とする短篇が持ち込まれたとき、すでにドイルは2冊のホームズ物語を上梓していた。正確な知識と分析的推理によって問題の解決にあたる科学的探偵を創造しようとの企図で書かれた『緋色の研究』（1887）と、主人公の麻薬常用癖を描く印象的な場面から始まる、世紀末的雰囲気濃厚な『四つの署名』（1890）である。しかしこれら2作は、ドイルが意気込みをもって取り組んだ作品であったにもかかわらず、作者が期待していたほどの成果をおさめ得なかった。作家の名も、名探偵の個性も、いまだ世の耳目を引くまでには至っていなかったのである。

もともとドイル自身は、ウォルター・スコットの手になるような本格的な歴史小説にこそ自分の文学的本領があると考え、これら2冊のホームズ作品を、意欲作とはいえ「肩の凝らない小品」のたぐいとみなしていた。<sup>1</sup>当時ドイルはポーツマス近郊の町サウスシーで、医業と作家業の二足の草鞋をはき、医師としての仕事のかたわら歴史小説の第一弾『マイカ・クラーク』（1889）を発表し、英国王エドワード四世の時代を扱った『白衣の騎士団』の執筆にも取りかかっていた。これら歴史ものの創作に手応えをつかんだドイルは1890年

11月末ころには、より多くの時間を執筆活動にあてるべくサウスシーでの開業に見切りをつけることを真剣に検討しはじめていたという。<sup>2</sup>

ドイルが医師としての経歴の中で一貫性を持つとは思われない選択の日々を送ったのち、ウィーンでの研修を終え、ロンドンで眼科医として開業する道を選んだのは翌1891年3月のことであった。高級医師街として知られるウィンポール・ストリート北のアップー・ウィンポール・ストリート2番地で、ドイルは後に回想している―「診察室と待合室の一部を年百二十ポンドの家賃を払って借りた。間もなくわかったことだが、診察室も医師の待合室になってしまったのだ。毎朝私はモンタギュー・プレイスにある下宿から歩いて、午前十時に診察室に入り、午後三時か四時頃まで座っていたが、私の平穩を乱す呼鈴が鳴ることは一度もなかった。」<sup>3</sup> こうして、いっこうに訪れない患者を待つあいだに執筆されたのが短篇のホームズ物語であった。4月のうちに矢継ぎばやに4篇が創作され、ドイルが悪性のインフルエンザに罹って病床に臥していた期間をはさみ、5月18日には第5篇目が仕上がって代理人宛に送付された。<sup>4</sup> 短期間で執筆されたこれら短篇は、しかし『ストランド』誌の編集長グリーンハウ・スミスを目をみはらせるほどの出来映えであった。猪突猛進型の性格の持ち主であったというグリーンハウ・スミスは、最初の2篇の原稿を読んでいるうちに、むくむく頭をもたげる賞賛の念を抑えきれず、原稿をふりかざしつつ社主ジョージ・ニューズのもとへ駆けつけたという。その折の興奮を、グリーンハウ・スミスは後年こう述懐している―「私にはすぐ、これこそがエドガー・アラン・ポー以来の最高の短篇作家の出現だ、とわかった。オフィスに駆け込むと、ニューズ社主の目の前に原稿を突きつけたのを憶えている。」<sup>5</sup>

『ストランド・マガジン』は1891年1月にジョージ・ニューズ社から創刊された月刊誌で、新機軸の特集を組んだり、1頁おきに挿絵を入れたり、さまざまな趣向で新たな購読者層の開拓に努めていたが、当初は掲載の目玉とすべき作品に恵まれていなかった。雑誌市場が拡大する一方で、上質の短篇小説が決定的に不足していたのである。苦肉の策として編集部はバルザックやモーパッサン、ユゴーなどの作品の翻訳で紙面をうめることも珍しくなかったという。グリーンハウ・スミスの回想によれば「短篇小説の名人というのは数少なかった。駄作の洪水の中であっふあっふしていた編集長の上に、天からの賜物が降って来た。うんざりして絶望していた編集長に幸福の光をさしかけた神の贈りものともいべき短篇小説が。プロットの巧みさ、文体の清澄さ、ストーリー・テリングの完璧な技術は見まがうべくもなかった。」<sup>6</sup> 苦境のなかで奮闘する編集部のもとへ、いわば救世主のように現れたのがドイルのホームズ短篇だったのである。これがドイルと『ストランド・マガジン』との、およそ37年間にわたって続く蜜月関係の始まりであった。拙論は、今日まで語りつが

れるホームズ伝説誕生の経緯をふまえ、その背景を分節化するとともに、のちに『シャーロック・ホームズの冒険』としてまとめられるこの第一短篇集の特質を改めて検証する試みである。

## II

『ストランド・マガジン』掲載のホームズ作品が江湖の好評を博するにいたった背景には、もとより相応の理由があった。まずドイルの作家としての資質が短篇に向いていたことに加え、一人の主人公をめぐって読切りの物語を連載するという、当時としては斬新な方式が時代の好尚に投じたことが挙げられるであろう。ドイルが発案したこの手法は、彼が自負するように、たしかに英国における雑誌連載の方式に新たなスタイルを確立するものであった。

連作を通じて一人の主人公が登場すれば一かりに読者の関心をつかみ続けることができれば—その雑誌に固定読者がつくことになる、と思いついた。他方、普通の連載長篇は雑誌にとって有利どころか不利にはたらく、と私はかねがね思っていたのだ。なぜなら、遅かれ早かれ誰でもいつかは読みもらいの号が出て来るから、そうすると以後興味を失ってしまう。それぞれが読み切りの連作に、一人の主人公出ずっぱりというのが、理想的な妥協案に違いない。(中略) このことに気づいたのは私が最初で、これを実行に移したのは『ストランド』が最初であると、私は信じている。<sup>7</sup>

眼科医の看板を掲げながら患者がまったく訪れなかった当時のドイルの状況を考えると、そこには文学的着想というだけでは片づけられない如才のない算盤勘定が働いていたとする見方もあるが、個性的な主人公を軸に展開される推理と謎解きの物語を毎号短篇で提供するという手法が、大衆化時代の要請に合致したことは事実であった。識字率の向上によって一般大衆を読者とする雑誌類への需要は高まっていたし、また鉄道網の拡がり旅行ブームを招来し、車中での手頃な読み物として週刊誌や月刊誌の売れ行きも順調に伸びていた。<sup>8</sup> そうした時代の趨勢のなかで、気軽に読めて、なおかつ次号への期待もふくらませるホームズ物語の連載は間違いなく新たな読者層のニーズに応えるものであった。

また夙に指摘されているように、霧と辻馬車とガス燈の灯りに代表されるヴィクトリア時代の雰囲気が色濃く反映された独特の作風も人気をよんだ要因のひとつであろう。大英帝国の繁栄を背景に海を超えて帝都へわたって来た犯罪者たちの動向も意識しつつ、国際色ゆたかな物語がくり広げられる一方で、英

国社会に厳然と存在する階級の壁をものともせず、王族や大貴族を睥睨し、時にスコットランドヤードの警部たちにも一目おさせる主人公の活躍ぶりに溜飲を下げる読者も少なくなかったにちがいない。あるいはまた写実的なリアリズムを描写の基本としながら、「ロマンスというお伽の国だけに見出される」ファンタジーの要素をみごとに融合させた語りの技術の確かさも指摘しておかなければならない。<sup>9</sup> 批評家エドモンド・ウィルソンの言葉を借りるなら、ホームズ譚は「主だった登場人物達が作者の手を離れて、彼ら自身の命を持つようになった『御伽話』」であり、主人公は「ポーやステューヴンソンから借りてきた幾つかの要素に、魔法をかけてつくられた」「聖霊」のごとき人物なのである。<sup>10</sup>

しかもこのようにお伽話の要素が絶妙に按配された痛快な物語が、中庸と抑制を旨とする端正な文体によって紡ぎ出されていることも見落とすことはできない。犯罪や邪悪を題材としているにもかかわらず、野卑や猥褻とは一線を画した節度あるその文章表現は、ヴィクトリア朝期の価値観の中心にあった健全なモラルに適合するものであったし、難解な言い回しや殊更な美辞麗句を避け、テンポのいい会話を巧みに織り混ぜた緩急自在の語り口も、階級や年齢の別なく多くの読者に支持された要因であろう。

ともあれ、ドイルの短篇小説家としての持ち味は『ストランド・マガジン』との契約で書かれた最初の6作品のうちに、すでに存分に発揮されているのを見ることができる。すなわち、ホームズにとって「あの女性」と呼ばれるアイリーン・アドラーが彼に劣らぬ才智をみせる「ボヘミアの醜聞」、メアリー・サザランドという女性と結婚を約束した男性が婚儀当日に行方をくらますという事件を扱う「花婿失踪事件」、赤毛の者を募集して、名目だけの仕事に法外な報酬をあたえるという奇抜な着想のかげで進行する金塊強奪計画を、ホームズが阻止する「赤毛組合」、ボスコム溪谷で起きた殺人の容疑で窮地に陥った若者がホームズに救われる「ボスコム谷の謎」、秘密結社にまつわる殺人を題材にした「五つのオレンジの種」、そして忽然と姿を消した紳士の消息をめぐって意外な真実が明かされる「唇の曲がった男」の6篇である。

このうちプロットの独創性と語り口の巧みさが際立っているのが「唇の曲がった男」である。ホームズ物語では書き出しの部分に最も創意が凝らされているといわれるが、この評言はこの短篇にもあてはまる。煙草のけむりと阿片の香りが立ちこめる阿片窟の異様な雰囲気、杳として行方が知れない男、その安否を気づかう妻、いわくありげな阿片窟のアジア人経営者、胡散くさい風体の物乞いの男、密室めいた現場と死体消失の謎、それを解き明かすホームズの水際立った名推理、そして事件の真相の呆気にとられるような意外さと、この短篇には探偵小説に求められる要件がほぼ余すところなく出揃っている。冒頭の妖しげで頹廢的な印象が、結末で鮮やかに払拭され、むしろ滑稽とさえいえる

読後感をもたらすのは、構成が巧みで決着のつけ方が秀逸であるばかりでなく、ホームズ作品としても出色といえるほどエスプリと諧謔味にとんでいるからである。しかも唇の振れた物乞いの運命を描いて人生の哀歎をにじませる、娯楽性と文学性を兼ね備えたこの短篇が、ホームズ物語全篇を通じて傑作の一つに数えられるのは故なきことではない。<sup>11</sup>

### III

さて、第一期契約のホームズもの6篇によって『ストランド・マガジン』は一気に売り上げを伸ばし、作者ドイルの文声もとみに高まったのであるが、意外なことにドイルはホームズ物語の創作を6篇のみで打ち切りにする腹づもりであった。入念な時代考証にもとづく本格的な歴史小説を著そうとのドイルの強い意気込みのあらわれであったが、しかしこの計画は、7月号に第1作目の「ボヘミアの醜聞」が掲載されて3ヶ月が過ぎるころには早くも変更を迫られることになった。というのも、購読者数が飛躍的に増大したことに気をよくした『ストランド』誌の社主ニューズが、もう6篇のホームズ作品をドイルに依頼してきたからである。ドイルは折から『亡命者たち』という歴史小説の執筆に追われ、しばらく返事を保留していたが、続篇執筆を求める編集部からの要請は強まる一方であった。原稿料をめぐる駆け引きを経て、ようやく10月になってドイルが、ホームズもの以外の作品執筆に優先権をあたえてくれるならばという条件つきで、『ストランド』誌側の提案を受け入れ、第二期契約に合意した。原稿料は第一期契約の額を約100ポンド上まわる6篇300ポンドであった。<sup>12</sup> 11月11日付のドイルの母親宛の手紙には次のような記述がみえる—「私は新シリーズ用の、五篇のシャーロック・ホームズ物語を書き上げました。(中略)これらの作品の出来は、最初のシリーズの水準には達していると思います。十二篇まとめれば、この種のものとしては、なかなか良い本になるでしょう。」<sup>13</sup>

こうして新たに書き下ろされた6篇も、編集部の期待にたがわぬ秀作揃いであった。第一期の6作品が犯罪を題材としているにもかかわらず「実際には幻想小説」であり、「時代の精神や雰囲気…が物語の中に溶け込んでいる」ところにその美点が認められるとすれば、<sup>14</sup> 第二期契約の各篇もひとしなみに“お伽話”的要素をたたえつつ、ヴィクトリア朝期の社会の動静や空気を適確に捉えていた。クリスマスの時期にロンドンのホテルで起きた宝石盗難事件を描く「青いガーネット」、遺産相続をめぐる計画された密室殺人をホームズが未然に防ぐ「まだらの紐」、報酬に誘われて秘密の仕事に従事し、親指を失う災難にあった男の依頼を扱う「技師の親指」、結婚式の途中で花嫁が失踪するという不可解な出来事をホームズが解き明かす「独身貴族」、多額の借財の担保として預

かった王冠の宝石紛失の謎を題材とする「緑柱石の宝冠」、そして住込みの家庭教師を依頼された若い女性がおこなう脅迫監禁事件にまきこまれる「ぶな屋敷」の6作品である。

始まりと中間部と終結部からなるホームズ物語の定型といえるパターンは、これら第二期の6篇においても踏襲され、それぞれに趣きの異なる「ロマンスというお伽の国」の物語世界のなかで主人公の名探偵ぶりが活写されている。たとえばシリーズの掉尾を飾る「ぶな屋敷」は、「芸術のために芸術を愛する者にとっては」というホームズの科白で始まり、探偵術をひとつの芸術として追求する彼の姿を印象づけるし、「青いガーネット」では、宝石盗難の罪を逃れようとする小悪党に対するホームズの処断とともに、落とし物の帽子をめぐるホームズ一流の推理を愉しむことができる。また最も人口に膾炙している作品の一つである「まだらの紐」では、義理の娘に対する父親の近親相姦的欲望が暗示されつつ、意外な生き物を使った殺人をホームズが阻止する緊迫感あふれる筋立ての中に、人生の裏面へ注がれた作者のまなざしを見てとることができる。とりわけ悪を調伏する役割を演じるホームズの姿を通して、人間心理の闇と、英国社会そのものに内在する悪の領域への作者の偏執的なまでの関心を指摘することも可能かもしれない。「ホームズ物語の難しいところ…は短篇一作を書くのに、中篇を書くのに必要なくらいの、明確で独創的プロットが必要」なことだという Doyle 自身の述懐があるように、プロットの創出に腐心した作家の苦勞の跡が窺われるとはいえ、<sup>15</sup> そこには人間洞察に裏打ちされた、幻想と現実が渾然一体となった仮構の物語宇宙が現出しているのである。

#### IV

ところでホームズ伝説誕生の舞台裏をさぐる時、作家と『ストランド・マガジン』とのかかわりに関連して、ここでもうひとつ触れておかなければならないのは、「ボヘミアの醜聞」掲載時から挿絵画家をつとめたシドニー・パジェットの存在である。今日ホームズの名をきいて、わたしたちが想い浮かべる

シルエット 影 像—鹿打ち帽をかぶり、肩マントをまとったホームズの姿—は、この挿絵画家の創案に負うところが大きいのであるが、パジェットの貢献はそれのみにとどまらない。『絵画の研究』の著者ジェイムズ・モンゴメリーによれば、「……何万という愛好家の知と情に及ぼしたパジェットの影響力は、いくら評価しても過大ではあるまい。その当時から今日に到るまで、それ以外の人物解釈、ムードはイギリスの読者の受け入れるところとならなかった」ほどなのである。<sup>16</sup> もちろん文学テキストとしてのホームズ物語の独自性に較べるとき、パジェッ

トはあくまでも作品の挿絵を担当した画家であり、伝説の誕生を促す主動的な立場にあったわけではない。挿絵の役割は何よりもまず原作の魅力をひき立てることにあり、挿絵画家の仕事は必ずしも作品の優劣を決するものではないのである。

だがそれにもかかわらず、ドイルと『ストランド・マガジン』とのあいだに成立した蜜月関係は、このシドニー・パジェットという挿絵画家の存在を抜きにして語ることはできない。活字が主役であった高級雑誌とはちがって、当時の一般家庭向きの大衆誌は挿絵をふんだんに取り入れて読者の興味をひくことを重視していたといわれ、あらたな読者層の掘り起こしをはかる『ストランド』誌が販売戦略上、挿絵を重視したのは理の当然であった。活字を追いつつ想像裡で織りなされる心象が、作中に配された挿画によって視覚的に補完されるとき、読書の喜びはおのずから高まるからである。「ドイルが完全にこれ〔ホームズ物語〕に全精力を投入するようになるのは、シドニー・パジェットという理想的な挿絵画家を得てからのことかもしれない」という興味深い推論を下しているのはグレアム・グリーンであるが、<sup>17</sup> ドイルとグリーンハウ・スミスとの信頼関係が伝説誕生の素地をかたちづくったとすれば、パジェットの挿絵は、ホームズという傑出した主人公のイメージを確立するうえで少なからず貢献したのである。

もともと、パジェットが『ストランド・マガジン』の仕事を引き受けることになったのは、編集部の思わぬ勘違いからであった。『ストランド』誌側ではホームズ物語の掲載にあたって、『ロビンソン・クルーソー』や『宝島』のすばらしい挿絵を描いたパジェットという姓の画家に白羽の矢をたてていたが、たまたまパジェット家には5人の兄弟がおり、そのうちの3人までが画家であった。編集部の念頭にあったのは、じつはシドニーの兄ウォルターであったのだが、十分な確認をとらないまま担当者は末弟のシドニーに仕事を依頼してしまった。興味深いのは、仕事を引き受けたシドニーがホームズのモデルに端正な面差しの兄ウォルターを選んだことであった。運命の女神は本来挿絵を描く立場であったはずの人物に、主人公のモデル役を振りあてたのである。しかし結局この予期せぬ思い違いが、いまや大方の人が一目でそれとわかるホームズ像を定着させることに繋がったのである。『ストランド』誌の読者が、劇場や演奏会場で偶然ウォルターを見かけ、「ほら、シャーロック・ホームズがいるよ！」と囁きあったことが一再ならずあったと伝えられている。<sup>18</sup>

実際シドニーが挿絵に描いたホームズ像は、原作者の念頭にあったイメージ——「もっと尖った鼻をして、鷹のような、そしてアメリカ・インディアンに似た風貌」<sup>19</sup>——よりもずっと容姿端麗なものであった。しかし自身の思い描く像と違ってはいえ、ドイルは当初からパジェットの絵の出来映えには満足し

ていたという。1891年7月9日付の編集長宛の手紙に、ドイルは次のように記している―「もし私の『シャーロック・ホームズ』に、挿絵を描いてくれた芸術家に会うことがあれば、私が彼の作品の出来に、とても感謝していることをお伝えいただければ、と思います。できることなら、いつまでもホームズ物語には彼に挿絵を描いてもらい、未来の出版者が別の画家を起用するのを辞退してもらえたら、と思う次第です。」<sup>20</sup> ドイルのこの願いは、1908年にパジェットが47歳で他界してしまったために絶たれてしまったが、「今ではパジェット氏が描いたホームズ像こそ、本当のホームズ像なのだ、とも考えております」という原作者の言葉に偽りはなかったものとみられている。<sup>21</sup>

いずれにせよ、パジェットによって好ましい潤色を加えられたホームズ像は名探偵の人気にいっそう拍車をかけ、『ストランド』誌の購読者を増加させることに大いに与って力があつた。ドイルの伝記作者の一人チャールズ・ハイアムはパジェットの貢献をこう評している。

パジェットは性的魅力を出し、1890年代の容姿を描くことによって、ホームズをハンサムに仕立て上げた。彼の描いたシャーロック・ホームズに、何十万という若い女性は俳優のような非現実的な存在として憧れ、何十万という男性はその完璧な服装やさまざまな帽子をかぶった姿を真似ようとした。その生みの親は望まなかったのに、シャーロック・ホームズは映画が誕生する以前のスターになったのである。<sup>22</sup>

## V

『ストランド・マガジン』連載のホームズ短篇が新たな伝説を生むにいたる経緯はおおよそ以上のようなものであつたが、それにしても『緋色の研究』と『四つの署名』では芳しい評価を得られなかったホームズ作品が、雑誌連載をきっかけに圧倒的な支持を勝ち得たのは何故であろうか。先述の通り一話読切りの連載方式が読者の嗜好に合致したことや、時代の雰囲気や巧みに盛りこみ、読者を飽きさせることのない仮構の世界を演出するストーリーテリングの冴えが大衆の心を捉えたことは間違いないとしても、それだけではホームズ物語が老若男女を問わない幅広い読者層に受け入れられることはなかったかもしれない。推理小説とは元来、ふしぎな謎を提示して、それを論理的な推理によって解きあかすことを主眼とするものであり、いったん謎が明らかになってしまえば作品への興味は失われてしまいがちである。ところがホームズ物語が再読三読に堪えるということは、謎の解明やそれに伴うスリルとサスペンスといった推理小説特有の魅力以上のものを作品が内在させていることを意味している。



つまりホームズ物語にはすぐれた文学作品と同様の、いわく言いがたい魅力がそなわっているということである。

ここで改めて物語宇宙の中心に位置するホームズとワトソンの人物像に目を向けてみると、新たな短篇シリーズの成功の根柢にこの二人の作中人物の魅力があることは疑い得ないと思われる。個性的な主人公とその相棒という設定は、すでにポーがオーギュスト・デュパンと物語の記述者「私」を登場させて先鞭をつけていたが、その方式を踏襲しているとはいえ、ホームズとワトソンを真実味あふれる人格の持ち主として造型したドイルの手腕には、やはり並々ならぬものがある。ともすれば主人公の強烈な個性の影に隠れてしまいがちなワトソンの役割にしてみても、事件捜査の協力者兼語り手としてのワトソンの存在意義は、けっして主人公の引き立て役の域にとどまるものではない。たがいに気心の知れた間柄であり、ときに真剣な、またときに諧謔味あふれる掛け合いをくり広げるワトソンという朋友の存在があればこそ、はじめてホームズは持ち前の推理の科学を駆使して探偵としての天分を発揮することができるのである。もし『ストランド』誌連載の短篇をひとつの音楽作品に譬えうるなら、ホームズという嚙喰たる主音に相和して、楽曲全体に温もりのある協和音を響かせるのがワトソンにほかならない。二人が生み出すその絶妙のハーモニーを核として、さまざまな音階と転調を交えた12の変奏曲が奏でられ、読者はそこに良質のキャラクター小説にも通じるリアリティを看取しつつ、いつとき現世のしがらみから解放されて、非日常的なロマンスの世界に身を委ねることになるのである。ワトソンは何をおいても信義にあつい篤実な人柄でなければならなかった。そしてホームズはワトソンという無二の友の存在によって生彩を放つ特異な性格と風貌をそなえていなければならなかった。そうなることによって二人は真に不滅の名コンビとして、文学史上に語り継がれる存在となることができたのである。

シャーロック・ホームズという比類なき個性がひとときわ見事な浮彫りとなって現前するのも、おそらくこのような文脈においてである。前作との関連をふまえていえば、『四つの署名』の中でその独自性が印象的に語られた主人公の非凡な才能は、短篇連作ではいっそう濃密なかたちで描き出される。読切り短編という形式上の制約ゆえに、ホームズの真価をかえって凝縮して表現しえたこともドイルには幸いしたかもしれない。芸術至上主義が唱道された19世紀末を背景とする作品にふさわしく、芸術としての探偵術を追求するホームズの姿が、まず「ボヘミアの醜聞」の冒頭で提示される——「ホームズのほうは、その完全にボヘミア的な気質から、あらゆる種類の社交を嫌い、ベイカー街の下宿にとどまり、古書の中に埋もれて、ある週はコカインに浸り、ある週は功名心に駆られ——つまり麻薬に陶酔する日々と、彼独特の鋭い天性でエネルギーに

仕事に打ちこむ日々を、交互に繰り返していたのである。」<sup>23</sup> そしてワトソンが自身の結婚を期にベイカー街の住居を出て、ホームズとは別々の暮らしを送るようになったことが述べられたうえで、相変わらず犯罪の研究に余念のないホームズの「すばらしい才能と驚くべき観察力」を、読者に近い立場にあるワトソンの実直な人柄に対置することによって、時として常軌を逸するホームズのエキセントリックな個性を浮かび上がらせるのである。<sup>24</sup>

こうした世紀末の審美派ホームズの人物像は、作者による自薦リストで第2位に選ばれた「赤毛組合」の中で、とりわけ典型的に描出されている。ホームズは「生气に溢れ、意欲的で上機嫌だった。彼の場合、こうした気分は、この上なくふさぎ込んだ気分と交互にあらわれるのであった」と『四つの署名』で言及された彼の二面性が、<sup>25</sup>「赤毛組合」では犯人一味を追いつめる直前にサラサーテの演奏会場で彼が見せる恍惚の表情の中に次のように描写される。

そうしている間の彼のおだやかな微笑を浮かべた表情や、ものうげな夢見るようなまなざしは、名探偵ホームズ、明敏な知力と迅速な行動力で情容赦なく犯罪を追求する男ホームズのものとは、とても思えなかった。このホームズという非凡な人格のなかでは、二種類の性質がかわるがわるに顔を出してくる。……彼の極度の厳密さや機敏さは、ときどき彼の内部にみなぎる詩的な瞑想的気分に対する反動なのではないであろうか。彼の気分は大きく揺れ動いて、極端な無気力状態から、むさぼるような精力にあふれた状態に一変する。……ホームズがつづけて何日も肘掛椅子にだるそうにもたれて、即興曲を作ったりゴチック体の古い書物を読んだりしているときほど、この男が真に恐るべき人間であるときはないのだ。そして突然、彼の追求欲が燃えあがり、すばらしい推理力が直覚の域にまで高揚して、ついには、彼の方法を知らない者たちからみれば、彼が人間ばなれのした知能をもっているのではないかと怪しむようにまでなるのである。<sup>26</sup>

あたかも長調と短調の違いさながら、明暗の色調を異にする二つの性格がこもごも顕われるホームズのこの二面性は、いうまでもなく人間としての彼の本性と分ちがたく結びついている。「赤毛組合」の結びで、事件を解決したあとのホームズが「ああ、もう倦怠が襲ってきた。ぼくの人生というのは、平凡な生活から逃れようとする果てしない努力の連続だ」と語るのは示唆的である。<sup>27</sup> 「むさぼるような精力にあふれた状態」と「極端な無気力状態」、別言すれば“情熱”と“倦怠”という一見両立しがたいものと映るこれら二つは、ホームズにあっては彼の存在構造に深く根ざしたものであり、さらにいえばダンディが秘めもつ本質の表裏のあらわれにほかならない。つまりホームズの生は索寞たる日

常から逃れるためにこそ営まれているのであり、ちょうどあの『悪の華』の詩人の心を憂鬱スプリズが占めていたように、ホームズの魂の深奥にも癒すべくもない倦怠がわだかまっているのである。

## VI

しかしシャーロック・ホームズのダンディとしての特質は、それですべてが尽きるわけではない。注目されるのは高踏的唯美主義者ホームズが世紀末的デカダンの風貌をそなえつつも、同時に現実の俗事と汚濁の中に存在基盤をすえる探偵の役割を担っていることである。探偵ホームズのもとには、犯罪捜査の専門家たるロンドン警視庁の面々のみならず、大貴族や政治家、麗しい妙齡の女性たちまでもが依頼人として足しげく訪れ、いきおいホームズは他人の秘密を覗き見る視姦者的な相貌を呈することになるのであるが、しかし翻って考えてみると、探偵という職業自体が、もともと他人の苦悩を糧とする因果のうえに成立している。名詞 detective のもとになった動詞 detect が「あらわにする、あばく」の原義をもつように、探偵は好むと好まざるとにかかわらず、他人の秘密をあばきたてる者、あるいは他者の秘密の領域への闖入者の性格をもたざるを得ない。だからこそまた逆にダンディの不逞な決意、すなわち他人を驚かしつつも、みずからは決して「心を動かされまいとする揺ぎない決意」が必要となるのである。<sup>28</sup>

探偵にとって不可欠といえるこのホームズの双面性は、期せずして作品の舞台であるロンドンの二重性に通底している。いや主人公に内在する二面性は、世紀末の英国社会そのものの両義性とも照応しあいつつ、物語世界に深みと奥行きを賦与する役割をはたしている。ベイカー街に依頼人が訪れて事件の幕が上がるまで、平和で穏やかにみえる社会の裏側には、「赤毛組合」のジョン・クレイや「まだらの紐」のグリムズビー・ロイロットなどの犯罪者たちが蠢く世界があり、ひとりホームズだけが、さながらトリック・スターよろしく、これら光と闇の世界を往き来しうる。<sup>29</sup> いわばホームズ作品は、外的現実を構成する善悪二つの世界がホームズの心の内なる世界とかたみに交響しあうことで、はじめて一つの楽曲としてのすがたを完成させるのである。

わたしたちは後続のシリーズで、暗黒社会の領袖モリアーティとの角逐を経たのち、ホームズがモリアーティなきあとのロンドンの現実を憂い、犯罪の芸術性の欠如を嘆くのを耳にすることになるであろう。あえて極言するならば、探偵ホームズにとって、犯罪の芸術性こそが彼の探偵芸術の価値を保証するものであり、探偵としての彼の真価は逆に犯罪の芸術性によって証明される。いや

さらに穿った見方をすれば、犯罪における芸術性の奪回だけが、ホームズが心の奥底で逆説的に呼びもとめていた聖なる祭儀ではないであろうか。ちょうどダンディがみずからの高貴を際立たせるために俗衆の存在を前提とするように、犯罪における芸術性こそがホームズの探偵芸術をいよいよ光彩陸離たる存在たらしめるのである。

こう考えてくるとき、探偵ホームズが近代的ダンディズムの伝統のうえに造型された人物であることは疑い得ないであろう。一世を魅了した伝説のダンディ、ポー・ブランメルの名優ぶりを「ゆらゆらとたゆたい、冷笑しつつ、傲岸不遜すれすれのところをさまよい、無謀のふちをかすめながら、しかもつねに或る不思議な中庸のうちに留まる、それがブランメルの流儀であった」と表現したのはヴァージニア・ウルフであるが、<sup>30</sup> 明敏なこの女流作家が喝破したように、ダンディの真骨頂は、礼節と傲岸不遜、虚栄と矜持、聖と俗、善と悪など、さまざまな二項群の境界上で絶妙の平衡感覚を発揮しつつ、みごとな綱渡りを演じてみせるところにある。いいかえれば一步誤れば破滅と隣り合わせたその紙一重の役割演技のうちにこそ、ダンディズムという表象美学の妙諦があるということである。

「シャーロック・ホームズは映画が誕生する以前のスターになったのである」というチャールズ・ハイアムの評言をここで再考してみるなら、「俳優のような非現実的な存在として憧れ」の対象となったホームズは、パジェットの挿絵によってそのイメージが定着した探偵という存在の表徴であると同時に、ダンディズムという様式美学に内在する表象性のシンボルたりうる人物であった。18世紀英国におけるダンディズム誕生の経緯に言及して、世界を見られるものへと表象化する視覚文化の文脈の中から、現実を美的仮象の地位に高めるダンディズムの綱領が誕生した、とはジャン・スタロバンスキーの言説であるが、<sup>31</sup> スタロバンスキーが分節化した視覚文化の脈絡で捉えるとき、ホームズは紛れもなく18世紀以来の表象化美学の伝統上に造型された近代的ダンディであり、ホームズ物語誕生の背景には、ドイルに豊かな恩恵をもたらした文学の伝統のみならず、ダンディズムというすぐれて表象的な存在美学の伝統が脈々と息づいているのである。

世紀末を代表するダンディのひとりにかぞえられるマックス・ビアボウムは「サタデイ・レビュー」誌1905年5月6月号で「私がまだ、物事に感じやすい年頃であった頃に、シャーロック・ホームズは突如として世間に現われた」とホームズの思い出を語っている。「それ以来、彼は私の人生の一部を成し、彼を自分の人生から排除することは金輪際できないだろうと思う。今でも彼のことを考えずに、ベイカー街を通ることはできない。」<sup>32</sup> 詩人として、また批評家・劇作家としても高名な T. S. エリオットもまたホームズ作品に魅了された文人

のひとりであった。ジョン・マレイ社版『シャーロック・ホームズ短篇全集』に寄せた批評文のなかで、エリオットはホームズ譚の最も偉大な点は「我々が彼について語るときは、必ずといっていいほど彼が実在の人物である、という幻想にはまり込むところにある」と述べ、原作者以上の真実味をただよわせるホームズの存在感を特筆すべきものと評している。

シャーロック・ホームズには深い人間性が描かれているわけではない。また、ホームズは深遠で精緻な心理描写をされているわけでもなく、人間の心理についての知識があるわけでもない。彼は一つの定式にすぎないのは明らかである。ホームズはディケンズやサッカレイ、ジョージ・エリオットやハーディ、またはジェーン・オースティンやブロンテ姉妹、ヴァージニア・ウルフ、さらにはジェイムズ・ジョイスの作品の登場人物が備えている迫真性を持っているわけではない。しかしそれでもなお……彼はフォルスタッフやウェラーズのように、我々にとっては実在の人物であるのだ。<sup>33</sup>

ドイルが探偵小説の範を仰いだポーの『ユリイカ』の言葉に倣っていえば、ホームズ物語の特質は第一短篇集『シャーロック・ホームズの冒険』の中に鮮やかに具現化しており、<sup>34</sup> こののち名探偵のイメージは原作者の手をはなれ、実在の人物に劣らぬリアリティをそなえた文学的表象として永く読者の中に生きつづけていくことになるのである。

---

## 注

<sup>1</sup> Sir Arthur Conan Doyle, *The Uncollected Sherlock Holmes*, compiled by Richard Lancelyn Green, (London, Penguin Books Ltd, 1983), p. 321.

<sup>2</sup> リチャード・ランセリン・グリーン「解説」(高田寛訳)、アーサー・コナン・ドイル『シャーロック・ホームズ全集 第3巻 シャーロック・ホームズの冒険』小林司・東山あかね訳、河出書房新社、657頁。

<sup>3</sup> グレアム・ノウン『シャーロック・ホームズの光と影—ホームズ100年、その生涯と時代』小池滋、日暮雅通、高山宏訳、東京図書、1988年、5頁。

<sup>4</sup> リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』660頁。

<sup>5</sup> グレアム・ノウン『シャーロック・ホームズの光と影』7頁。なお、ドイルとグリーンハウ・スミスとの信頼関係については、Doyle, *The Uncollected Sherlock Holmes*, pp. 53-54を参照。

<sup>6</sup> 同書、9頁。

<sup>7</sup> 同書、7-8頁。

<sup>8</sup> 河村幹夫『ドイルとホームズを「探偵」する』日本経済新聞出版社<日経プレミアシリーズ032>2009年、73-74頁。

- 
- 9 Doyle, *The Uncollected Sherlock Holmes*, p. 322.
- 10 リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』689-90頁。
- 11 たとえば江戸川乱歩は自身の好むホームズ短篇の一つにこの作品をあげている。江戸川乱歩「英米の短篇探偵小説吟味」『江戸川乱歩全集第27巻 続・幻影城』光文社、2004年、31-32頁。
- 12 グレアム・ノウン『シャーロック・ホームズの光と影』12-13頁。
- 13 リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』675-76頁。ただし表記の統一上、引用文中の「編」の字を「篇」に変更させていただいた。
- 14 同上、663頁。
- 15 グレアム・ノウン『シャーロック・ホームズの光と影』14頁。なお、意外な生き物が殺害に関与するという趣向は、ポーの『モルグ街の殺人』に先行例を見出すことができ、またロイロット博士の人物像の源流を、チャールズ・ディケンズの『追いつめられて』の登場人物ジュリアス・スリンクトンに求めることができるという見方がある。前者については Arthur Conan Doyle, *Sherlock Holmes: The Major Stories with Contemporary Critical Essays*, ed. by John A. Hodgson (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1994), pp. 173-174 を、後者については小林司／東山あかね編『シャーロック・ホームズ大事典』東京堂出版、2001年、125-126頁を参照。
- 16 コナン・ドイル『シャーロック・ホームズ全集 第1巻 序曲』小池滋訳、東京図書、1982年、85頁。またリチャード・ランセリン・グリーンもパジェットの役割を次のように評している—「彼の果たした役割は、ディケンズの作品の挿絵を描いたフィズ（ハブロット・ナイト・ブラウン）や、ルイス・キャロルの作品の挿絵を描いたサー・ジョン・テニエルに通じるものがある。」リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』677頁。
- 17 グレアム・グリーン「ホームズの到来」（深町真理子訳）『シャーロック・ホームズ全集 第五巻 緋色の研究/四人の署名』パンフィカ、1978年、280頁。
- 18 Doyle, *The Uncollected Sherlock Holmes*, p. 55-56.
- 19 リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』679頁。
- 20 同上、679頁。
- 21 同上、679頁。
- 22 ディック・ライリー、パム・アカリスター編『ミステリ・ハンドブック シャーロック・ホームズ』日暮雅通監訳、原書房、2000年、24頁。
- 23 コナン・ドイル『ボヘミアの醜聞』（日暮雅通訳）『シャーロック・ホームズ全集 第5巻 ボヘミアの醜聞』東京図書、1986年、118-119頁。
- 24 同上、119頁。
- 25 コナン・ドイル「赤毛クラブ」『シャーロック・ホームズ大全』鮎川信夫訳、講談社、1986年、500頁。
- 26 同上、26頁。
- 27 コナン・ドイル「赤毛組合」（日暮雅通訳）『シャーロック・ホームズ全集 第6巻 赤毛組合』東京図書、1986年、188頁。ただし表記の統一上、原文の「アンニュイ」の訳語を「退屈」から「倦怠」に変更させていただいた。
- 28 シャルル＝ピエール・ボードレール「現代小説の画家」『ボードレール全集 IV』阿部良雄訳、筑摩書房、1987年、169頁。
- 29 高山宏『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』東京創元社＜創元ライブラリ＞2008年、11-40頁、Stephen Knight, "The Case of the Great Detective" in Arthur Conan Doyle, *Sherlock Holmes: The Major Stories with Contemporary Critical Essays*, pp. 368-380

---

等を参照。

<sup>30</sup> Virginia Woolf, *The Common Reader: Second Series* (London: Hogarth Press, 1948), p. 51.

<sup>31</sup> ジャン・スタロピンスキー『自由の創出—十八世紀の芸術と思想』小西嘉幸訳、白水社、1982年、78-87頁を参照。

<sup>32</sup> リチャード・ランセリン・グリーン「解説」『シャーロック・ホームズ全集 第3巻』687頁。

<sup>33</sup> 同上、688頁。

<sup>34</sup> エドガー・アラン・ポー「ユリイカー—散文詩」(牧野信一・小川一夫訳)『ポオ 詩と試論』東京創元社〈創元推理文庫〉1983年、284頁を参照。

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2010年1月8日受理 2010年2月8日採録決定